

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 174, 2016

## VIEW 展望

写真 / 教育 / アジア / 吉川直哉…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

総務委員会…3 研究企画委員会…3

支部・研究会だより 関西支部…4 関西支部夏期映画ゼミナール…8

中部支部ショートフィルム研究会…4 東部支部…5 映画文献資料研究会…5

映像テキスト分析研究会…5 映像心理学研究会…6-7 アニメーション研究会…7

映像表現研究会…8

## REPORT 報告

東部支部第39回映画文献資料研究会「プロデューサー加賀四郎と『舗道の囁き』(1936)」

／西村安弘…9

## FORUM フォーラム

日本学術振興会育志賞第7回(平成28年度)推薦募集…10

## FROM THE EDITORS

編集後記…10

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第174号」2016年4月1日発行

発行人: 武田潔 編集担当 / 総務委員会: 相内啓司(委員長)・鳥山正晴(副委員長)・

伊藤高志・石坂健治・遠藤賢治・橋本英治

日本映像学会事務局: 176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内

phone: 03-5995-8287 / fax: 03-5995-8209 / e-mail: JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

# 写真／教育／アジア

吉川直哉

写真に限らずテクノロジーが深く関係する表現領域は、いつもハードが先行して新しい世界を広げてきた。写真教育もまたハードに押され続けているように思う。

写真教育は技術習得が柱のひとつである。テクノロジーは日進月歩で、それは今も変わらない。その発展に教育の現場では、撮影機材や照明器具が進化する度に、大きな設備投資が求められ、それに対応する新しいカリキュラムが必要になってきた。戦後日本の写真において、ひとつの大きな波は、ファインアートとしての写真の確立であろう。今年に入って、日本の写真にとって残念な訃報が相次いだ。1978年、東京に写真を扱う画廊「ツァイト・フォト・サロン」を開設した石原悦郎さんが2月に亡くなった。まだ写真作品の主な発表の場は「カメラ雑誌」という時代に、石原氏が写真を美術品として扱う画廊を開設したことは、周囲から心配されるほど先駆的だったという。また石原さんは、1985年の世界科学博（つくば学園都市）に合わせて「つくば写真美術館」を開いた。1995年には東京都写真美術館が開館した。アメリカの美術館に遅れること四半世紀。これらの活動は、後の日本の美術館における写真作品に対する姿勢の我田引水となった。関西では、同様の写真画廊「ピクチャー・フォトスペース」の相野正人氏が今年1月に早逝した。このような先駆者の活動は日本の写真教育に大きな影響を与えた。それまで印刷原稿でしかなかった写真が、美術品として展示、販売されるということは、それに耐えうるような化学処理を施すというだけではなく、写真に対する意識そのものを大きく変えることになった。

次に写真教育の現場にもっと大きな波が来た。デジタル写真の登場と普及である。その影響は既に多くの場で語られているので省くが、それまでキャンパスの中で、大きな面積を占めていた暗室が徐々に縮小され、代わってコンピュータやプリントが並ぶ「明室」が大部分を占めるようになった。さらに、それはカリキュラムにおいても変革を迫ったはずである。写真が主に暗室で生み出される時代は、暗室での技術習得を目的とした時間が教育全体のなかで大きく占めていた。ところが、暗室作業が机の上のPCとプリンタに代わっただけで、基礎教育としての技術習得という点では、余り変わっていないのではないかもしれない。写真が教育として確立していなかった時代は、写真は産業活動の一端を担う技術であり、あとの大半は記録や娯楽でしかなかった。もちろん日本の写真の黎明期を築いた先駆者たちは意欲的な活動を展開し、たくさん作品を残しているが、それらはむしろ稀有な存在だった。当時の写真はテクノロジーであり、日本の伝統的な徒弟制度の中で鍛錬することで、代々受け継がれてきた。ではいま写真教育は何をすべきだろうか。

日本の学校教育での写真は、早くから「日本大学」や「東京フォトスクール」などで始められているが、本格的なものが全国的に始まったのは戦後だろうと思われる。誤解を恐れずに言えば、それは

ごく最近に形作られてきたのではないかと考える。1915年（大正4年）に「東京美術学校」が臨時写真科を一時的に設けたこともあるが、それは全国の営業写真館の後継者育成が主な目的であった。現在は、写真教育を掲げる芸大や美大は全国で約10校、専門学校も10校ほどあるが、急速なデジタル写真の普及による設備投資やカリキュラムの改革、さらに少子化などに伴う学生数の激減、社会風潮の変容に伴う若者意識の変化、各校ともその対応に苦慮しているようだ。

筆者は大学院で写真教育を研究テーマにしたこともあり、1990年頃以降、国内外で写真教育の現場を積極的に見るようになってきた。デジタル写真が急速に普及してきた90年代後半では、訪問したこちら側が逆に日本の状況を質問されることが多く、教育の現場がその対応に苦慮している印象を受けた。さらに最近では、動画のほか、インターネットなど写真表現の領域を広げ、各々に工夫を凝らした写真教育を組み立てているところもある。

それらはアジアの隣国で似ている部分が多い。韓国では日本以上の少子化が社会問題となって学校教育に影響を与え、さらに就職難もそれに追い打ちをかけている。また、急速な経済発展を遂げた中国も同様のようだ。ただ、教育者側面から検証してみると、韓国では1980年代初めに私費留学が自由化され、以降、写真専攻の留学生が全世界に飛び立ち、国内の写真教育の意識を一気に高めることになり、留学から帰国した世代が、後の写真教育に大きな影響を与えている。中国でも、それまでは国家主導のマスメディアの現場で写真撮影の経験を培った人材が写真教育に充てられていた時代から、韓国と同様、世界中で留学経験をした人材が写真教育を牽引するようになっている。

そこで次のことを提唱したい。写真教育や写真研究におけるアジアのネットワークを構築できないか、ということである。もちろん、大学間の交流や個人レベルでは様々な研究のネットワークがあるが、より開かれたものを切望する。昨年、『韓国写真史 1631—1945（青弓社）』が発刊された。日本の写真史上、初めて日本語で韓国の写真史に触れることができる貴重な書である。を通して感じたのは、写真史における黎明期のヨーロッパのように、写真史や写真研究は一国だけでは成立しないのではないかということである。日本で写真史を学ぶ場合、必ずヨーロッパで始まりアメリカへと移る。もちろん日本の写真史もあるが、アジアの写真史についてはほとんど触れられない。それらを包括的に調査研究し、写真史や写真教育に活用できる場が生まれることを願いたい。まずは東アジアの隣国だけでもいい。幸いにも日本には有能な東アジアからの留学生がたくさん来ている。その若い世代の研究者がアジアの写真を研究する場ができないだろうか。

（よしかわ なおや／写真芸術、写真教育）

## 総務委員会

委員長 相内啓司

第6回総務委員会を以下のように開催しました。

日時：2016年3月19日(土) 13時30分～14時30分

場所：日本大学芸術学部江古田キャンパス

東棟映画学科ミーティングルーム

出席：相内啓司、鳥山正晴、石坂健治

※オブザーバー出席：武田潔、加藤哲弘

通常、総務委員会は総務に関わる審議事項を理事会にかけ事前検討するために開催されます。議案と討議された内容は以下のとおり。若干の経緯を含め報告します。

### 議案

#### 1. 会費滞納会員退会勧告に関する件

前回報告では4年以上の滞納者には退会勧告をすることが総務委員会で確認され、その後の理事会で審議にかけられる旨を伝えた経緯がある。前回理事会ではその年限について再検討されることが決定したため、総務委員会では改めて3年または4年を上限として再審議することを提案した。理事会では会費の未納が学会の円滑な運営の支障をきたす要因となることを鑑み、会費の納入を促す意味でも上限3年が適当であろうという判断がなされ、承認された。今後、この決定に従い順次当該の会員へ通知する。

#### 2. 第22期役員選挙に関する件

第22期役員選挙管理委員会が正式に発足し、奥野邦利会員(東部支部)が選挙管理委員長に選出された(以下委員：奥野邦利、相内啓司、鳥山正晴、末永航、芦谷耕平、野村建太)。役員選挙の投票のための通知作業、開票、役員選挙の結果の確認、大会での承認へ向けて順次作業を進めていくことが確認された。

#### 3. 会報に関する件(発行の頻度と時期)

年4回発行されている会報(電子版3回、ペーパー版1回)についてその頻度について検討がなされ、総務委員会案として年3回が適当ではないかと理事会に提言したが、理事会では会員への情報提供サービスを維持するという観点から現行通り年4回の発行回数を維持することが決定された。

#### 4. 第42回大会(日本映画大学)進捗について

大会開催校の石坂健治実行委員長から、大会会場案及び、開催プログラム案の計画案と問題点などが提示され、調整する方向性で検討がなされた。詳細については大会実行委員会内で最終的な調整を行うこととなった。

#### 5. 次回大会(2017年)について

通例により、次回大会は関東圏以外での開催が検討されている。開催校の候補を幾つか挙げ、今後その可能性について交渉を進めることが確認された。

#### 6. 2016年度予算案について

今季は学会運営のために必要な会費の未納が依然としてあり、潜在的に数年間分の未納金が累積している。とはいえ、例年に比べて会費の未納については比較的減少傾向が見られる。そのことにより、3月期の決算では実務的な運営費に限っては赤字に転落するという最悪の事態はなんとか回避された。学会運営に関する会費の重要性と連動して、会費の

納入をお願いするキャンペーンを継続的に行ってきたが、これからも各会員のより一層のご理解により順調な学会運営を維持していくことが必須といえる。

#### 7. 業務委任契約書について

会計監査をお願いしている会計士、及び事務局業務の委託に関して、次年度の契約の仕方が検討された。業務委託契約書を作成して契約を交わすことを理事会に提言し、承認された。

#### 8. その他

学会HPの運営、及び投稿のガイドラインの検討・策定については、担当理事の橋本会員が欠席のため、次回総務委員会に持ち越された。

以上

(あいうちけいじ／総務委員長、京都精華大学芸術学部)

## 研究企画委員会

委員長 齊藤綾子

### 報告と計画について

研究企画委員会では、第四回研究企画委員会が以下のように開催されました。

日時：2016年3月19日(土) 13時半～15時

場所：日本大学芸術学部江古田キャンパス東棟S302

出席：齊藤綾子、奥野邦利、大橋勝、草原真知子、黒岩俊哉、村山匠一郎

#### 1) 第42回大会発表予備審査について

A: 研究発表については46件の申込みのうち、1件を理事会での審議が必要と内申した。

B: 作品発表については11件の申込みがあり、すべて承認した。

何れも審査基準は2015年12月理事会で決定された以下の3点。

- ・約400字の概要が記載されていること。
- ・映像に関する発表内容であること。
- ・学会にふさわしい発表内容であること。

#### 2) 前期から引き継ぎの課題(研究会活動費助成)について

ホームページの活用、機関誌との連動等の課題については次回の委員会で検討することになった。

以上

(さいとうあやこ／研究企画委員長、明治学院大学文学部)

支部・研究会だより

## 関西支部

中村 聡史

関西支部では京都精華大学の伊奈新祐会員のお世話により、下記のとおり関西支部第7回研究会を開催いたしました。

日時：平成28年3月26日（土）午後2時より

会場：京都精華大学 清風館

研究発表1：1960年～1980年代の国内個人制作アニメーションの相関について

発表者：森下豊美会員（京都精華大学大学院マンガ研究科博士後期課程／名古屋学芸大学非常勤講師）

発表概要（森下豊美）

国内の個人によるアニメーション制作が始まったのは1917年、当時「楽天パック」の漫画家であった下川凹天による黒板アニメーションからだと言われている。またこれ以後徐々にアニメーション制作者も増えプロダクションシステムによる商業作品も作られていくが、1960年久里洋二、柳原良平、真鍋博を中心とした「アニメーション3人の会」が発足して以降、個人による実験性、芸術性を重視したアニメーションも増え、現在も美術系大学の学生及び出身者の作品を中心に、世界の名だたるアニメーション映画祭で発表される作品以外にも現代美術、アマチュア作品（小型映画）など、違う評価軸を有する個人によるアニメーションやアニメーショングループがいくつか存在する（した）が、それぞれの相違や類似、または関連性の有無について言及する研究がほぼ無いのが現状である。

本発表では、個人制作アニメーションがさかんになり始めた1960年～1980年代の違う歴史や評価軸を有するいくつかのアニメーショングループ及びその相関関係を考察しながら、国内個人制作アニメーションの全体像を俯瞰する。

研究発表2：身近なものへの視線と「女の子写真」についての一考察

発表者：荒川美世子会員（武庫川女子大学）

発表概要（荒川美世子）

本発表は1990年代に大きなムーブメントを起した「女の子写真（ガーリーフォト）」を軸に、その前後の写真文化との関係性を探るものである。

「女の子写真」の撮影者たちのほとんどは、10代後半から20代にかけてのキャリアが浅い女性たちで占められている。にもかかわらず、彼女たちの作品は'96年前後を中心として多くの雑誌で取り上げられ、写真界の主要な新人賞を次々と受賞していった。

「女の子写真」が登場する背景には、以下の三つがあげられる。まずは、70年代から80年代にかけて、カメラの使用が容易になったという技術的な側面。写真を志す女子学生の増加。さらには「プリクラ」によるポートレートの変換文化が発生したことである。これらの背景によって生まれた「女の子写真」という親和的な写真文化は2000年以降から現在にかけて、どのように変化し、存在しつづけているのだろうか。

本発表では、その背景や特徴を試論的に捉えなおし、後発の写真への影響と、それ以前に同様の特徴をもつ写真の有無について探っていく。

以上2件の研究発表ともに活発な質疑応答が交わされ、有意義な研究会となりました。

今後の予定といたしましては、平成28年5月14日（土）に花園大学にて第78回研究会を、平成28年11月下旬から12月中旬ごろに大阪大学にて第79回研究会、また、平成28年9月の第一週末に第38回夏期映画セミナーを開催いたします予定です。

以上

(なかむら さとし／関西支部担当常任理事、関西学院大学)

支部・研究会だより

中部支部

## ショートフィルム研究会

林 緑子

ショートフィルム研究会では下記の内容・日時で、以下5件の開催を計画しています。

## 第15回活動

会期名 若手短編映像制作者交流会「tea time video」第1回

期日 2016年5月15日（日）15:00-17:00

内容 作家プレゼンテーション、ディスカッション、交流会

会場 シアターカフェ

企画 伊藤仁美

主催・運営 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨 学校や所属の枠を越え、若手短編映像制作者同士が、定期的に気軽に交流できる場を設ける。また、交流会のまとめとして、展示上映を開催し、作家と鑑賞者が、交流しつつ作品鑑賞をする場を設ける。その後、上映会や交流会以外においても、鑑賞者が作家を知る端緒として、一連の記録をまとめた冊子を広く配布する。

公式サイト <http://teatimevideo.strikingly.com/>

## 第16回活動

会期名 地域における短編アニメーション制作研究講演「個人制作アニメーションの伝播と受容1」

期日 2016年7月（予定）

内容 講演、パネルディスカッション

会場 シアターカフェ（予定）

企画 森下豊美

主催・運営 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨 1960年に草月アートセンターで始まった作家による個人制作アニメーションの上映会は東京だけに留まらず、国内主要都市でも開催され、そのムーブメントは全国に広がった。当時の作品の上映と共に、当時アニメーション上映に携わった当事者をゲストに名古屋での受容を検証する。

目的 個人制作の短編アニメーション制作者は美術系大学を中心に多くいるが、その歴史や系譜は知られていない。その源流を、当事者をゲストに周知する。

## 第17回活動

会期名 若手短編映像制作者交流会「tea time video」第2回

期日 2016年9月（予定）

内容 作家プレゼンテーション、ディスカッション、交流会

会場 長者町トランジットビル

企画 伊藤仁美

協力 N-Mark、深谷崎子

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

運営 日本映像学会ショートフィルム研究会、N-mark、深谷崎子

主旨 学校や所属の枠を越え、若手短編映像制作者同士が、定期的に気軽に交流できる場を設ける。また、交流会のまとめとして、展示上映を開催し、作家と鑑賞者が、交流しつつ作品鑑賞をする場を設ける。その後、上映会や交流会以外においても、鑑賞者が作家を知る端緒として、一連の記録をまとめた冊子を広く配布する。

公式サイト <http://teatimevideo.strikingly.com/>

## 第18回活動

会期名 名古屋フィルムミーティング2016

期日 2016年11月（予定）

内容 上映、交流会

会場 愛知芸術文化センター12階・アートスペースEF（予定）

企画・運営 名古屋フィルムミーティング実行委員会（代表 曾我部哲也）

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨 全国からの公募による映像作品を上映し、観客の投票による観客賞を授与することで、東海地区での学生や一般の映像制作を盛り上げる場とする。

公式サイト <http://filmm.info/>

## 第19回活動

会期名 若手短編映像制作者交流会「tea time video」展示上映

期日 2017年2月（予定）

内容 作家プレゼンテーション、ディスカッション、交流会

会場 未定

企画 伊藤仁美、他

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨 学校や所属の枠を越え、若手短編映像制作者同士が、定期的に気軽に交流できる場を設ける。また、交流会のまとめとして、展示上映を開催し、作家と鑑賞者が、交流しつつ作品鑑賞をする場を設ける。その後、上映会や交流会以外においても、鑑賞者が作家を知る端緒として、一連の記録をまとめた冊子を広く配布する。

公式サイト <http://teatimevideo.strikingly.com/>

(はやし みどりこ／ショートフィルム研究会代表)

## 支部・研究会だより

### 東部支部

奥野 邦利

報告と計画について

東部支部では平成27年度に「映像教育研究会」が新たに加わり、平成25年度よりスタートした新制度後の登録済み研究会は11を数えます。会報での報告にもあるように、各研究会の活動も活発に行われており、会員間の情報交換も盛んになっているようです。

研究会申請は春期(4月末)、秋期(9月末)の年2回となっています。東部支部所属で新たなアプローチで研究を進めている会員のみなさんは積極的に申請くださればと思います。

また、年度を跨ぐことにはなりましたが、近いうちに支部講演会も計画していますので、決まりましたら学会HP及びMLでお知らせします。

支部還付金(研究助成費/支部運営費)については、年度末をもって決算しますので、次号会報ではその報告を予定しています。

以上

(おくのくにとし/東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部映画学科)

## 映画文献資料研究会

田島 良一

映画文献資料研究会では、昨年(2015年)の12月12日(土)の午後3時から5時まで日本大学芸術学部南棟4階S405教室に於いて、第38回研究例会を開催しました。発表者は日本大学大学院芸術学研究所博士前期課程に在籍している牛嶋興平氏で、「日本映画におけるキャラクターとしての河童像の変遷」というテーマで研究発表を行いました。以下は牛嶋氏による発表のレジュメです。

「河童」は日本文化にとってなじみ深いものである。古くから映画に限らず、様々なメディアに登場し、幅広い河童像が生み出されてきた。そして、現代の多くの人々はそのような「河童」を「行動や性格」ではなく「外見の特徴」からイメージする。

このようになったのは、江戸時代に本草学者たちによって「河童」を動物として確定する作業が試みられ、その作業に付随して図像レヴェルで「河童」イメージの統一がなされ、全国各地に存在した河童的存在群が「河童」の名前に包摂されたことに端を発する。そして、そのようにして「キャラ図像のレヴェルでの記号化」と「名前の画一化」が行われた「河童」たちは、日本映画、テレビドラマ、CM、アニメ、漫画で多様な描かれ方をしてきた。その結果、現代の私たちが「河童」を「外見の特徴」からイメージ=判断するようになった。つまり、物語に紐づけられていなくても、特定の「外見の特徴」さえ備えていれば、「河童」とみなすようになり、「河童」のキャラ図像はさまざまなヴァリエーションをもつようになった。一方で、「行動や性格」にあたるキャラ人格は新たに獲得され続け、「複数化」してきた。

これらの結果として、「外見の特徴」を備えている「河童」のキャラ図像は「複数化」されたキャラ人格にふさわしく造型することが可能となり、作品内で個々の異なる姿をもった「河童」が同時に展開できるようになった。そのようにして「個人の名前」と「個人の身体」とを併せ持つことができるようになったのが、現代の「河童」のキャラクターの在り方である。

以上の内容の発表が映像資料を交えて約90分程あり、その後、出席者からの質疑応答が30分にわたり活発に交わされました。研究会の終了後は近くの居酒屋で忘年会を兼ねた恒例の懇親会を開き、ここでも河童談義で盛り上がり、昨年最後にふさわしい研究会となりました。

(たじまりょういち/映画文献資料研究会代表、日本大学芸術学部)

## 映像テクスト分析研究会

中村 秀之

2015年度第2回(通算第13回)の研究発表会を下記の通り開催しました。

2016年1月9日(土曜日)15時30分開始~18時

立教大学池袋キャンパス4号館別棟1階4151教室

発表者:玉田健太(早稲田大学大学院)

表題:雪解けの前に——ニコラス・レイ『危険な場所で』のラストシーン再訪

参加者は10名でした。参考映像の上映を交えた玉田会員の発表について全体討論を行いました。新年早々の開催になったことなど諸般の事情で少人数の会になりましたが、テクスト分析の方法の根本に関わる問題などをめぐって中身の濃い議論が展開されました。

今回も発表者ご自身に簡潔な報告をご執筆いただきましたので以下に掲載します。

本発表ではニコラス・レイ監督による『危険な場所で』(1951)について考察した。ポイントとして挙げたのは、主人公の刑事ジムにとって視覚と手が、彼の精神的問題から生じる暴力を伴うものであった点と、無人の雪山を撮ったラストショットの意義である。前者については、主に二つのジムの視点ショットから論じた。一つ目のショットは、手にしたフォークの刃を容疑者の写真に向けているジムの視点ショットである。これは彼の視覚と手が暴力に結びついていることを端的に示している。二つ目のショットは彼が犯人を追って走るときの視点ショットである。このショットは唐突に導入され、また走る人物の視点を模したカメラの特異な動きが見られるなど、継ぎ目の目立たない古典的な演出にはなっていない。このショットは観客を物語世界にいる刑事の位置に立たせようとしているように見えるが、むしろその突出した演出によってそのような同一化に違和感を覚えさせるようになっている。しかし、これは単なる失敗ではなく、まさに自分が刑事であることを受け入れられないジムの心情を観客にも共有させるショットなのだ。

この視覚と手の暴力性に応答するのが、ジムと盲目のメアリの手が触れ合う有名なショットを含むラストシーンである。ポイントとして挙げた雪山のラストショットは、雪山に隠れ、そこで死んだダニーの不在を観客に想起させる。傷ついた主人公たちが互いに触れ合うことで、手を暴力性から救出したとすれば、観客は主人公たちの代わりに雪山を見てダニーの死と不在を想起することで、暴力と結びついていた視覚を救出するのである。

質疑応答では、観客を想定することの必要性・正当性や、視点ショットに関する理論的観点、また音声に関する指摘など、多くの貴重な意見を頂戴した。これらを踏まえて発表内容を見直し、より発展させた形で論文などにまとめていこうと思っている。

以上

(なかむら ひでゆき/映像テクスト分析研究会代表、立教大学現代心理学部映像身体学科)

### 報告と計画について

平成 27 年度の映像心理学研究会は、平成 28 年 3 月 6 日にアニメーション研究会と合同の研究会を開催した。会場は日本大学文理学部百周年記念会議室 1 であった。当日のプログラムは以下の通りであった。

1:00 ~ 1:50

表題「静止画の連続呈示に何を見るのか～多様な運動対象とその動き～」  
野川中氏（明星大学、ゲスト発表）

#### 要旨

静止図形を異なる位置に連続的に呈示すると、1 つのものが移動するように見える。このように外的な動を伴わずに動きが知覚される現象は仮現運動と呼ばれる。静止画の連続呈示による動きの表現は、映画やアニメーションの根幹である。心理学では、前後の呈示の“間”が 60ms とする時に最適に運動が見えることが明らかにされている (Wertheimer, 1912)。しかしながら、映画やテレビの呈示方法における各静止画の“間”は、非常に短いか、あるいは存在しない。2013 年のパネルディスカッション「アニメーションと仮現運動～この似て非なるもの?～」では、動きが見えるための時間条件が異なるという観点から議論が行われた。

本話題では、静止画の“呈示方法”に着目し、仮現運動として様々な運動現象が生じることを明らかにする。上記議論的である時間条件の相違も、その諸相の一部として包括的に理解することができる。

2:00 ~ 2:50

表題「アニメーション制作実習課題の検討とその作品の印象評定」

野村康治会員・野村建太会員（日本大学）

#### 要旨

画力にばらつきがある学生を対象としたアニメーション制作の教育、特に動きの制作を習得する初歩として、日本大学芸術学部映画学科では、カットアウト人形を使用した歩きのアニメーション制作課題を課している。具体的には、人形の体の部位と関節の数を指定し、人形を制作。カメラの固定など撮影方法は各自検討し、自宅で行う。完成した動画は、講習会で見ながら問題点を指摘し、何度か作り直す。といったものである。

本研究では、こうして制作された作品の動きについて、制作者である学生に自身が作ろうとした（頭に思い描いていた）作品の動き、造形と、完成した作品のそれとの齟齬の程度をマグニチュード推定法で回答してもらった。この回答をもとに実習課題の教育的効果と意義を検討したい。

また、こうした課題作品を対象として、その動きに対する印象評定調査も併せて行った。芸術系ではない学生を評価者とし、先行研究の評定項目（25 の形容詞）を用いて調査を行ったが、評定結果に先行研究で確認されたような明確な因子構造は確認されなかった。しかしながら、各作品の評定をプロフィール化したところ、特徴的なパターンがみられた。研究会では、この調査研究の結果も併せて報告したい。

3:00 ~ 3:25

表題「様々な顔の印象評価とアニメーションへの応用可能性」

渡邊伸行氏（金沢工業大学、ゲスト発表）

#### 要旨

セマンティック・ディファレンシャル (SD) 法を用いた、様々な顔の印象評価の研究を中心に紹介する。具体的には、ヴィジュアル系バンドのメイク、女性の上目遣いや伏し目、ヘアカラーの研究などを紹介する。ヴィジュアル系バンドのメイクの研究では、ファンの中で定義されているバンドのカテゴリーごとに、そのバンドメンバーの顔のメイクやヘアカラーから受ける印象が異なることが示唆された。女性の上目遣いや伏し目の研究では、上目遣いは社交性や魅力の度合いが高く、伏し目の研究では逆に社交性も魅力も低く評価されることが示された。ヘアカラーの研究では、4 色のヘアカラーと、髪の長さや前髪を組み合わせた女性の顔画像の印象評価実験を行った結果、ヘアカラーによって顔の印象が左右される可能性が示された。以上の研究によって得られた知見が、アニメーション研究にどのように役立つか議論したい。

3:30 ~ 3:55

表題「萌える顔、萌える声の設計に関する研究」

山田真司氏（金沢工業大学、ゲスト発表）

#### 要旨

最近のアニメ、ゲームにおいて「萌える」キャラクターが多く用いられている。本研究ではまず、ゲームのキャラクタークリエイト機能を用いて様々な顔を合成し、これらを刺激として SD 法による印象評定実験を行った。その結果、「萌える」顔は、美しく、子供っぽい顔であり、「美人」顔は、美しく、大人っぽい顔であることが明らかになった。さらにこれらの結果から、「萌える」顔を構成するためのサイズ比を明らかにした。次に、女性声優 5 人がそれぞれ 100 通りの状況設定の下で発話した「おにいちちゃん」という音声を用いて、印象評定実験を行った。その結果、「快さ」と「興奮度」の因子が抽出され、萌える声は快さ高い必要があることが分かった。また、萌える声は、基本周波数、スペクトル重心ともに高く、発話者のサイズが小さい、すなわち幼いことを示唆する情報を持っていることが明らかになった。

以上のように今回の研究会はアニメーションの動きに関する報告 2 題とキャラクターに関する報告 2 題で構成された。野川氏の報告は知覚心理学サイドからの報告で、通常の仮現運動の手続きが 2 光点の点滅で動きと知覚を検討しているのに対し、8 光点の連続提示寄る動きの知覚を調べているところにアニメーションに繋がる方法論の展開があった。2 点ずつの提示によると、2 点点だけであるにもかかわらず歩きのような印象が得られるという報告は、アニメーションにおける歩きには体全体よりもその部分のタイミングが重要であることを示唆している。それに対し野村康治・野村建太両氏の発表は、アニメーションの動きを実際に学生が作った時にそこから得られる印象を評価するものであり、動きがごちないものであっても、その動きの評価は自然 - 不自然、軽快 - 鈍重といった、先行研究で認められた軸によって行われていることを示

していた（上記のレジュメには「明確な因子構造は認められなかった」とあるが、発表ではその点を訂正して述べていた）。キャラクターの分析では、渡邊氏は目と髪型に特化して報告し、伏し目に社交性の低さを見出し、髪型よりは髪の色が印象を決定していることを述べた。山田氏は、「萌え」をテーマにした報告を行い、萌える顔は子どもぽささと美しさの要素を併せ持った顔の特徴を持ち、その声は背が小さいものの特徴を持つと述べた。つまり幼さの印象が萌えを決定づけていると結論付けた。

今回の研究会の成果は、アニメーションの基礎的なテーマを、科学的な方法論で検討したものとして意義深い。今後もこうした基本的な検討を続けることで映像が成立する基本的な心理的な知見を積み重ねていきたいと思う。

平成 28 年度の研究会の計画は未定であるが、例年 2 度研究会を開催するようにしてきているので、同様に計画したいと思っている。

（よこた まさお／映像心理学研究会代表、日本大学文理学部）

## アニメーション研究会

横田 正夫

### 報告と計画について

平成 27 年度のアニメーション研究会は、平成 28 年 3 月 6 日に映像心理学研究会と合同で、日本大学文理学部百周年記念会議室 1 で開催された。アニメーション研究会は「持永只仁研究特集として、以下のプログラムで実施された。

4:10 ~ 5:00

表題「持永只仁のアニメーション」

横田正夫会員（日本大学）

#### 要旨

持永只仁が日本で監督した作品は良質な人形アニメーションであり、人間の健全な本性を描こうとする思想に満ちている。そこには人を怒らせず、相手の良いところを見出し、それを伸ばそうとする教育者の理想的なあり方が見出せる。たとえば、「瓜子姫とあまのじゃく」では、あまのじゃくは瓜子姫に言われるままに、彼女の仕事を手伝おうとする。仕事をすることを媒介にして、あまのじゃくは人間的な本性を露わにする。このように持永のアニメーションの特質は、あまのじゃくといったように、差別され虐げられかねない対象との間に深い関係を築き、差別が描かれないということである。そうした表現は、持永が中国のアニメーションの仲間との深い交流を背景にしているのであろう。こうした持永の作品は、異なるものへの不寛容が繰り返し苛烈に描かれている現代日本の映像メディアに対して改めて取り組むべき重要なテーマを提起するものであり、現代的な意義が大きいといえる。

5:10 ~ 6:00

表題「1955-1963: 人形映画製作所と MOM の映画～電通映画社に残された資料を中心に～」

和田敏克氏（東京造形大学、ゲスト発表）

#### 要旨

太平洋戦争敗戦後、中国におけるアニメーション映画製作の基盤を築いた持永只仁が帰国したのは 1953（昭 28）年。その後、国内での自身の本格的な制作活動は 1955（昭 30）年、元朝日映画社の稲村喜一プロデューサーとともに「人形映画製作所」を設立したことに始まる。その際大きな役割を果たしたのが、電通映画社の小畑敏一であり、雑司ヶ谷にある電通映画社の現像所内に敷地を提供、『瓜子姫とあまのじゃく』をはじめとする児童向け教育映画 9 作品の製作（教育映画配給社との共同）はもちろん、米ビデオクラフト社からの発注による『ピノキオの冒険』の日本側製作も電通映画社が担当した。また MOM の設立に際しても、田無の特撮スタジオの敷地提供、日米合作『ウィリーマックビーン魔法の機械』製作など、その関係は続くことになった。昭和 30 年代を中心とした、日本国内における持永只仁の映画制作を考えると、果たして電通映画社は、どのようなきっかけで関わり、具体的にどのような役割を果たしていたのか。現・電通テックの倉庫に残されていた小畑敏一の資料をもとに、当時の状況を読み解く試みをここから開始してみたいと思う。

持永只仁は日本の人形アニメーションを育てた人として知られているが作品や経歴について必ずしも十分に語られてきていなかった。持永が「只の人」として自分を位置づけ、目立つことを避け、自身の経歴を誇るわけでもなかったことによる。しかし、アニメーション史的に見ても、人形アニメーション作家の多くを育てた教育者としての立場ばかりでなく、中国のアニメーション作家を育てたこともあり、日中の映画人の交流を深めた人でもあった。作品はいずれも誰が見ても分かりやすいといった姿勢を維持し、その中でも今に通じるテーマを語っている。そうした持永の特質を作品から論じたのが「持永只仁のアニメーション」であり、アニメーション制作で米国との合作で持永が苦労した時代を語ったのが和田氏の報告であった。ビデオクラフト社の要求する人形について持永は真摯に応えようと作り直し、フィルムにした時の印象について手紙で連絡していると時代性を思うと、合作の苦労がしのばれる。早く返事を欲しいという手紙の文面は、電子メールが使用される現在でも切実な問題であろうが、それが手紙のやり取りで行われていたことを和田氏は実際の手紙を紹介しながら説明した。

会場には持永の弟子である眞賀里文子氏と持永監督の娘の伯子氏も同時に参加しており、持永の残したシナリオ「二つの太陽」の人形アニメーションの制作中であることが語られた。持永の人形アニメーションの伝統が今にしっかりと引き継がれていることがわかる紹介であった。

平成 28 年度の研究会の予定はまだ立てていないが、例年 2 度ほど開催してきているので、同様に 2 回ほど開催したいと考えている。

（よこた まさお／アニメーション研究会代表、日本大学文理学部）

Image Arts and Sciences 174 (2016) , 8

支部・研究会だより  
映像表現研究会

伊奈 新祐・奥野 邦利

報告と計画について

昨年(2015)の10月末に東京、11月末に京都で「インターリンク学生映像作品展」が開催されたことは、前の会報で報告しましたが、今後、参加21校の代表作の中から各校の推薦教員による投票によって優秀作品を選抜(「学生選抜作品集DVD」の作成)します。今後はこの選抜作品集を上映するとともに、研究会を行う予定です。

なお、東部会では、現在学生選抜作品集を作成するための準備を進めています。参加各校からの許可をもって、動画共有サイトYouTubeへの作品アップロードを行い、推薦教員の互選によって数作品が選抜されます。

「ISMIE2014」と検索していただければ、以前の参加作品もご覧いただけますので、お時間の許す範囲でご覧ください。映像制作の新たな状況が垣間見えると思います。

また、伊藤隆介会員が中心となり、北海道教育大学の地域連携事業「あそびプロジェクト Vol.7」の部門として、「インターリンク：学生映像作品展 [ISMIE] 2015」の代表作品プログラムが上映されました。今後も各地域での連携を進めていく予定です。

開催日：2016年2月20日(土)

会場：北海道教育大学岩見沢校 地域文化活動棟シアター教室

主催：日本映像学会映像表現研究会、岩見沢校映像研究室

プログラムⅠ (65分)

- 阿佐ヶ谷美術専門学校／イメージフォーラム映像研究所
- 久留米工業大学情報ネットワーク工学科
- 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]／大阪成蹊大学芸術学部
- 東京工芸大学芸術学部／九州産業大学芸術学部
- 成安造形大学／京都精華大学芸術学部

プログラムⅡ (68分)

- 尚美学園大学芸術情報学部／玉川大学芸術学部
- 多摩美術大学映像演劇学科／東北芸術工科大学映像学科
- 大阪芸術大学芸術学部／名古屋学芸大学メディア造形学部
- 日本大学芸術学部／宝塚大学東京メディア芸術学部
- 東京造形大学／北海道教育大学

以上

(いな しんすけ／映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部)

(おくのくにとし／映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)

Image Arts and Sciences 174 (2016) , 8

支部・研究会だより  
関西支部夏期映画ゼミナール

豊原 正智

夏期映画ゼミナールは以下の要領で開催を予定しています。

「加藤 泰特集一生涯100周年記念一」

- ・『風と女と旅鴉』(1958)
- ・『大江戸の侠児』(1960)
- ・『醜の母』(1962)
- ・『幕末残酷物語』(1964)
- ・『緋牡丹博徒お童参上』(1970)

その他、助監督の3本(熊谷久虎、伊藤大輔作品)を予定。

また、シンポジウムのパネリストは交渉中で、5月の大会時にチラシを配布する予定です。

開催日：平成28年9月2日(金)、3日(土)、4日(日)

会場：京都文化博物館

以上

(とよはら まさと／関西支部夏期映画ゼミナール代表、大阪芸術大学)





## 「プロデューサー加賀四郎と『舗道の囁き』(1936)」報告

西村 安弘

第39回映画文献資料研究会を2016年3月8日(火)13:00～15:30、フィルムセンター(京橋)にて開催、同館収蔵の35ミリ・プリントによる『舗道の囁き』(1936)を鑑賞した後、同作品のプロデューサー加賀四郎のご子息である加賀祥夫(元松竹演劇プロデューサー)氏と日本大学大学院芸術学研究科の小笠原隆夫会員との対談を行った。

1931(昭和6)年に松竹を脱退した鈴木傳明が、監督・主演した『舗道の囁き』は、同じく松竹宣伝部出身の加賀四郎が1936(昭和11)年に設立した加賀ブラザーズ・プロの第1回作品として完成させた作品である。ジャズ歌手ベティ稲田とタップ・ダンサー中川三郎が出演した本格的なジャズ・ミュージカル映画だが、戦前は封切られることのないまま、敗戦後の1946年になって、『思い出の東京』と改題され、松竹の配給でようやく公開された。その後、プリントは失われたものと思われていたが、野村芳亭の『乳姉妹』(1932)などと共にアメリカで発見され、フィルムセンターに収蔵されたものである。<sup>1</sup>

同館では、1996年の企画上映『日本映画の発見Ⅱ：トーキーの開始と戦前の黄金時代』や2007年の『日本映画史横断② 歌謡・ミュージカル映画名作選』の中で上映された。劇中で『ダイナー』や『セント・ルイス・ブルース』が歌われる『舗道の囁き』は、1930年代の日本におけるジャズを受容という音楽史的観点からも重要な作品であり、今後の更なる研究が待たれるところだ。

祥夫氏によると、伯父の加賀一郎は、明治大学在学中の1920(大正9)年、アントワープ・オリンピックの100メートル及び200メートル走に出場した名選手だった。<sup>2</sup> 同じく明治大学の水泳部に所属していた鈴木傳明は、1921(大正10)年開催の第1回全国各大学対抗競技大会(後のインカレ)で活躍し、同大の優勝に大きく貢献したことで知られる。<sup>3</sup> 陸上と水泳の違いはあったものの、二人は近い関係にあり、加賀一家との交際に発展したのだという。加賀ブラザーズの命名は、米メジャーのワーナー・ブラザーズに倣ったとのこと。(次兄の二郎も松竹に入社、戦後には歌舞伎映画のプロデューサーとして五所平之助の『黄色いカラス』(1957)等を手がけ、松竹の常務まで務め上げた。)

『舗道の囁き』のプリントが渡米した経緯は不明だが、祥夫氏の記憶では、東京大空襲で神田に三軒あった家が焼けた時に、消失したものだと思込んでいたようだ。ベティ稲田が帰国した際に持参したか、あるいは伯父の一郎が1932年のロサンゼルス・オリンピックに役員として参加した時の人脈に頼ったのかも知れないという。

新興キネマを経て、1942(昭和17)年創立時の大映に入社した加賀四郎は、営業調整部長、宣伝部長、企画部長などの要職を歴任、三隅研次の『剣鬼』(1965)や増村保造の『刺青』(1966)などの企画を担当した。祥夫氏は父親の後を追うようにして大映に入社したが、後に松竹に移籍している。同じく大映に在籍した小笠原会員とは入れ違いになった模様だが、コンビの革靴を愛用していた加賀部長の姿が粹人として印象深く刻まれていたという。生前の加賀四郎を知る二人の貴重な対談は、時代の証言としてビデオで収録された。

## 註

- 1 H.O. 「『舗道の囁き』の反響」、(『NFC ニューズレター』、第9号、1996年9-10月号、p.9)
- 2 <http://www.meiji-kyoso.com/ayumi/history/08401907151926/>
- 3 <http://swimeiji.wix.com/meijiswimmer#!/bushi/cgek>

## &lt;加賀四郎関連参考文献&gt;

「座談会 プロデューサーは何を考えているか：青柳信雄×藤本真澄×菅見恒夫×加賀四郎×本木莊二郎」(『キネマ旬報』、1950年12月上旬号)  
 「座談会 海外に於ける日本映画：大野求×加賀四郎×武田俊一×小田勇×今田智憲×黒田豊治×田中純一郎」(『キネマ旬報』、1955年1月下旬号)  
 加賀四郎「『地獄門』その後」(『キネマ旬報』、1955年5月上旬号)  
 「映画宣伝 6つのポイント 島田良造(松竹)×加賀四郎(大映)×工藤明(東宝)×富田秀富(新東宝)×吉田信(東映)×石津清(日活)×大橋重勇(本誌)」(『キネマ旬報』、1957年夏の特別号)  
 加賀四郎「特別口絵 映画のファクター 大映計画委員会」(『キネマ旬報』、1957年12月上旬号)  
 「わたしたちのはなし3 加賀四郎×祥夫×まりこ」、(『キネマ旬報』、1963年2月上旬決算特別号)  
 加賀祥夫、瀬川昌久、高崎俊夫「蘇る幻の映画『舗道の囁き』 対談 加賀祥夫×瀬川正久」、(『CD ジャーナル』、2012年、10月号)

(にしむら やすひろ/東京工芸大学芸術学部映像学科)

## フォーラム

## ■日本学術振興会育志賞 第7回(平成28年度)推薦募集

日本学術振興会 育志賞の概要

—優秀な大学院博士課程学生の顕彰・支援—

### 1. 趣旨

日本学術振興会(以下「本会」という。)は、天皇陛下の御即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、平成21年に陛下から御下賜金を賜りました。

このような陛下のお気持ちを受けて、本会では、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することで、その勉学及び研究意欲を高め、若手研究者の養成を図ることを目的として、平成22年度に「日本学術振興会 育志賞」を創設しました。

### 2. 対象分野

人文学、社会科学及び自然科学にわたる全分野

### 3. 対象者

平成28年4月1日現在34歳未満であり、次の①又は②に該当する者であって、平成28年5月1日において我が国の大学院博士後期課程(医学、歯学、薬学又は獣医学を履修する4年制の博士課程を含む)に在学している者

①大学院における学業成績が優秀であり、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいる大学院生であって、当該大学長から推薦された者

②①に該当する大学院生であるとして所属する学会長から推薦された者

なお、推薦に当たっては、論文等の業績のみにとらわれず、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な者を多様な観点から推薦願います。

また、海外からの留学生で大学院博士後期課程に在学している者についても、推薦することができます。

### 4. 推薦権者

1) 我が国の大学の長(大学長推薦)

推薦数: 人文学、理工系、生物系各1名、その他に分野を問わず1名の計4名まで

2) 我が国の学術団体の長(学会長推薦)

推薦数: 1名まで

※学術団体については、日本学術会議協力学術研究団体となっている学術団体に限ります。

また、自薦・個人推薦は受けません。

### 5. 授賞等

授賞総数は毎年度16名程度とし、受賞者には賞状、賞牌及び副賞と

## 編集後記

総務委員会

■映像学会会員の皆様、会報No.174号をお届けいたします。今回「VIEW展望」では関西支部の吉川会員に「写真/教育/アジア」と題してアジアへの展望を語っていただきました。欧米のみならず、アジアも含めて広く世界に情報を発信していくことは学会の使命だと考えます。その一助としてWebページもスマートフォン、タブレットに対応して読みやすくなっています(学会事務局の方々の目に見えぬ努力に感謝いたします)。会員のみならず皆様のご意見を取り入れる投稿のページも用意しております。どうかご活用ください。(橋本)

して学業奨励金110万円を贈呈します。

また、受賞者は、希望により翌年度から特別研究員等に採用することとします。その場合、研究奨励金等が支給されます。

特別研究員等への採用を希望する者は、翌年度の4月1日の在学年次、学位の取得状況等に応じた採用区分の特別研究員又は外国人特別研究員に所定の手続きを経て採用することとなります。既に特別研究員として採用されている受賞者についても、希望により前記と同様の扱いを受けることが可能です。詳細については、受賞者に対して別途お知らせします。

なお、特別研究員または外国人特別研究員への採用に当たっては、原則として他のフェロロシップ、研究費の助成等を受給することはできません。また、定められた規則等を遵守して頂きます。

以上

第7回(平成28年度)の推薦募集

受付期間: 平成28年6月8日(水)~10日(金) 17:00(必着)

※女性研究者について積極的な推薦の検討をお願いいたします。

日本学術振興会 育志賞

JSPS IKUSHI PRIZE

受賞候補者の推薦募集

—優秀な大学院博士課程学生を顕彰—

● 対象者: 34歳未満、日本の大学で博士課程に在学している者  
 ● 推薦権者: 1) 大学長(人文学、理工系、生物系、その他に分野を問わず1名) 2) 学会長(1名)  
 ● 授賞数: 16名程度  
 ● 副賞: 賞状(学賞)及び学業奨励金110万円  
 推薦受付期間  
 平成28年6月8日(水)~6月10日(金)  
 詳細: 学術会議ウェブサイト <http://www.jspss.go.jp/ikushi-prize/index.html>

JSPS IKUSHI PRIZE  
 日本学術振興会  
日本学術振興会賞(学賞)・奨励金 財団法人日本学術振興会 人文学部事業課研究奨励金課  
 〒100-0005 東京都千代田区千代田5-3-1 TEL: 03-3055-2612 FAX: 03-3023-1988